マルクス研究の最前線から現代資本主義を読み解く

――ケヴィン・B・アンダーソン『周縁のマルクス』が拓く新地平

後藤道夫
都留文科大学名誉教授 ×
平子友長
一橋大学特任教授 ×
木下武男
元昭和女子大学特任教授 ×
佐々木隆治
立教大学准教授

佐々木：本日は今年二月に邦訳が刊行されましたケヴィン・B・アンダーソン著『周縁のマルクス』の座談会にお集まりいただきありがとうございます。さっそく監訳者でもある平子先生から、まず簡単にこの本の内容をご紹介していただけますでしょうか。

アメリカ・マルクス研究の到達点

平子：最初に私たちがこの本を翻訳するに至った問題意識をお話ししたいと思いますが、序文にもあるように、本書は、アメリカにおけるマルクス研究の蓄積とその現在の到達点を明らかにするという趣旨で書かれています。これはどういう意味かと言いますと、アメリカのマルクス主義の中には、いわゆる経済主義的あるいは生産力主義的なマルクス主義、そしていわゆる西洋中心主義的なマルクス主義、さらには階級問題をとりわけ重視した労働者中心主義的なマルクス主義、これらの特徴を体現する伝統的あるいはソ連型マルクス主義があったのに対して、本書はそれらとは全く異なる潮流のマルクス主義を打ち出しているわけです。

この別潮流のマルクス主義のポイントは、まず、生産力主義あるいは階級還元主義などの立場をとらず、そして歴史発展においては、非常に複線的な立場をとり、かつ、階級の問題だけではなく、とりわけアメリカの文脈においては、人種そしてジェンダーの問題が労働者階級の運動に対して果たす大きな役割に注目するというものです。ですから、アンダーソンは、階級・人種・ジェンダーに配慮した、より複合的なマルクス主義を構想する潮流にコミットしています。

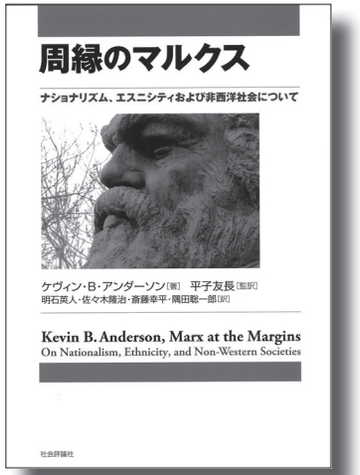
その際に、こうしたマルクス主義をアメリカに定着させる上で非常に大きな役割を果たしたのが、ラーヤ・ドゥナエフスカヤというロシア出身の亡命アメリカ人で、彼女は一時期トロツキーの秘書も勤めた経歴もあったのですが、ある時期にトロツキズムとは一線を画し、独自なマルクス主義の立場を確立しました。そして、今日においてはアンダーソンとピーター・ヒューディスという研究者が中心的人物となっています。また、本書の背景的説明になりますが、ドゥナエフスカヤの立場は大きく二点に要約されます。一点は、マルクス研究におけるヘーゲル研究の重要性です。彼女は、エンゲルスが強調したように、体系と方法の区別を立てて体系的なヘーゲルを拒否するのではなくて、ヘーゲルの著作そのものがマルクスの階級・人種・ジェンダー分析にとって非常に豊かな哲学的源泉であると考えます。アンダーソンも歴史研究者という側面を本書では持っていますが、別の著作では、レーニンの『哲学ノート』やヘーゲルの弁証法、ヘーゲルとマルクスの弁証法の関係などを論じています。それからもう一つ、ドゥナエフスカヤは、階級と人種そしてジェンダーの相互関係を把握する方法論を強調しています。背景として、実はアメリカにおいては、たとえば『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』の雑誌などに発表された、マルクスの様々な論文を編集・整理し、それをマルクス研究に活かすという方法が、一九二〇年以来確立されています。アンダーソンの研究もその蓄積の上に成り立っていますが、非常に新しい論点として、MEGA第四部に収録される、マルクス最晩年の一八七九年から八二年にかけての未公刊抜粋ノートの研究を取り入れています。これが『周縁のマルクス』のマルクス研究に対するオリジナルな貢献です。

本書の概要とその画期性

少し長くなりましたので、本書の内容についての要約はできる限り短くしますが、大きな流れとして、マルクスは『共産党宣言』から一八五三年のインド評論あたりまでは、資本主義的発展がもつある種の進歩的な役割を認め、その立場からイギリスによるインド植民地支配に関して、それがいかにインドの伝統的社会関係を破壊するものであっても、インドにこれまで欠如していた進歩や歴史的発展をもたらすという意味で、イギリスの植民地支配は肯定的な役割を果たすとみなしていました。これはマルクスの『要綱』の表現では、いわゆる「資本の文明化作用」を認めていたということになります。ところが、一八五六年のアロー号事件、一八五七年のセポイの乱などに対するインド人や中国人の抵抗を分析する

中で、次第にそのような、いわばイギリス資本主義が中心となって世界史を変えていくという見方を修正していきました。その結果、一八六〇年代にはポーランド革命に対する支持、南北戦争における奴隷解放問題に対する支持を通して、第一インターナショナルが形成されていきますが、マルクスはこれを理論的に重く受け止めます。どういうことかといいますと、第一インターナショナルという労働者階級の国際的連帯が、一見それとは無縁に見える、ポーランドの独立問題そして黒人奴隷の解放問題との関連において形成されてきたということをアンダーソンは非常に強調しています。これが、人種と階級を統一的に把握するというマルクスの新しい弁証法とされ、アンダーソンは『資本論』にもこの弁証法が貫かれていると述べています。

そしてアンダーソンが強調するのは、六〇年代後半に、アイルランド独立問題に対する態度をきっかけにして『共産党宣言』以来の立場が明確に逆転していく点です。つまり『共産党宣言』においては、アイルランドやポーランドはイギリスにおいて、つまりイギリス労働者階級の革命的行動によって解放されるという立場に立っていたのが、六〇年代後半になると、支配的な民族の労働者階級は、被支配的な民族に対する支配を是認している限りは自国の資本家階級による支配を克服することはできないとされます。つまり、アイルランドの独立がむしろイギリス労働者階級の解放の前提をなすという形で、いわば優劣関係が明確に逆転していく。そしてこの流れの中で七〇年代前半にフランス語版『資本論』を出版する際には、『資本論』第一巻で描かれた、「封建的生産様式から資本主義的生産様式への移行」が「西ヨーロッパ」に制限されるという、いわばかなりダイナミックな転換がマルクスのなかに生じます。そして七〇年代後半になると、マルクスは資本主義におけるマージナルな分野の研究にほとんど没頭し、かつそれと並んで、古代社会そして中世社会の研究、つまりいずれも資本主義にとって外部をなす歴史および社会関係の研究に関心が向けられます。これらの研究は、いわば論文の形をなすことなく、マルクスは生涯を終えますが、アンダーソン的に言えば、結局マルクスにとって資本主義システム論というのは、広義と狭義の二つのものがあって、狭義の資本主義システム論というのは、いわば『資本論』を原理論として、資本が支配的なモメントとして展開される資本主義システム論です。そして、七〇年代後半から死に至るまでに、マルクスは、資本主義システムが非資本主義的な歴史的関係と衝突したときに、資本の論理だけでは説明できず、他方で伝統的社会の側からの抵抗の論理だけでも説明できない、いわば両者が衝突した時に起こる新たな現象なり法則性なりを分析しようとする、新しい広義の資本主義システム論に到達したのではないか。アンダーソンによる説明では、単線的歴史観から複合的歴史観への転換とやや抽象的に語られていますが、私なりの肉付けをするとすればこう言えるのではないかと思います。以上です。



ケヴィン・B・アンダーソン（著）、平子友長（監訳）、明石英人・佐々木隆治・斎藤幸平・隅田聡一郎（訳）『周縁のマルクス――ナショナリズム・エスニシティおよび非西洋社会について』（社会評論社、2015年）

なぜ日本のマルクス研究から『周縁のマルクス』が生まれなかったのか

佐々木：次に、後藤先生に、通読されてのご感想や特に注目した点などお話しいただければと思います。

後藤：とても知的な興奮をかき立てられる本で、大部ですが、夢中で読みました。最初に、平子さんがおっしゃった階級還元論と歴史の単線的発展論の問題は、日本でもずいぶん議論はされてきたという気がするのですが、議論された場所や側面がだいぶ違っていて、かつ日本人が英語であまりものを書かないというのもあり、日本で議論されてきたことアメリカでの蓄積との交流がほとんどなかったのだと改めて感じました。日本の場合、階級還元論に対する批判は、ほぼ市民と階級という観点からなされてきたと思います。必ずしもエスニシティや人種が主な問題として提出されてきたわけではなくて、最近になってジェンダー問題が出てきましたが、これも実はジェンダーと階級との関係に内在した議論がなされているかというと、単純なマルクス主義批判は存在するとしても、極めて不十分だといえます。ただ、アメリカで蓄積されたものとは角度が違いますが、いわゆるフランス三部作や『ドイツ・イデオロギー』、『経哲草稿』についても、それな

りの研究がなされてきたので、単純に階級に還元するという議論は、それほど日本の中では少なくとも理論的には影響力を持っていたとは思えないですね。ただし問題は、運動との関係では事情が異なるということがありますので、運動上の問題と理論的蓄積の問題は、日本の場合には分けて考えないといけないと思います。

また、単線論の問題もやはり市民と階級という議論の延長線上に、平田清明さんがフランス語版『資本論』を非常に重視しましたので、フランス版『資本論』や『要綱』の「諸形態」が結構読まれて、マルクスの主張は単線的発展ではないという話も理論的には研究者に行き渡っていたと思います。

それから、階級還元論と単線論問題で実践的・理論的にもかなり影響を与えたのは、結局ロシア革命とレーニンの議論だったと思います。レーニン自身が、歴史の順序が逆転した革命とロシア革命を捉えているわけで、自分たちの革命は、おおよそ西洋の単線的発展とは違った革命であり、アジアやアフリカでの革命とヨーロッパでの革命のちょうど中間に位置するであろうが、大きな社会変革の軸はおそらく西洋にあるという趣旨のことを述べていました。自分たちロシア革命の意味は、社会主義の松明を掲げて、その火花を本来の社会主義革命の本体に提供し続けるという位置づけですね。アンダーソンの文章を読んでいて、レーニンの議論とほとんど同じような感覚を覚えた場所がいくつもありました。

というわけで大きな理論枠組みそのものについては、はじめて見たというような感覚は持ちませんでしたが、マルクス自身が南北戦争やアイルランド、ロシア、そしてドイツの古ゲルマン共同体その他について、どの程度内容のある発言をしていたのかに関して、これほど整理されて説得的なものを読んだのは初めてでしたので大変驚きました。やはりアンダーソンがいうように南北戦争、アイルランドなどについては、きちんとマルクスの議論を追って整理するという作業が日本でほとんどされてこず、自分の勉強もその影響を受けてきたと改めて実感した次第です。

社会科学者としてのマルクス
――「周縁」への視座

佐々木：それでは、木下先生はいかがでしょうか。

木下：この中で私だけがマルクス専門の研究者ではないので、ちょっと場違いなのですが、大変興味深く読みました。まだ私が若いころは、マルクス主義がいわゆる三分野の、哲学・経済学・政治学＝革命論に分けられ、そこに各文献が押し込められて学習がなされました。けれども、本書を通読すると、三つの分野に収まらないマルクスが再発見され、それが本当に新鮮だったのです。いわば社会学者というか、社会構造分析をするマルクスに出会った。マルクスが、共同体論、ジェンダー論、黒人問題などにおいて、社会構造分析を行うことで、様々な問題提起をしているのが、私にはとても驚きでした。そして、社会科学者として、非常にアカデミズムを重視し、それこそ丹念にノートをとって実証研究から歴史事実をおうせいに摂取したのですね。また、こうした社会構造分析を現実と結びつけて変革の梃子を提起する、つまり社会科学者としての社会構造分析と、梃子や抵抗の拠点を提起する革命家というマルクス像が見事にこの本で叙述されており、大変印象的でした。

それと、これは我田引水になりますが、下層や周縁に変革の契機を見出そうというのが六〇年代後半以降のマルクスの姿勢だったように思います。その関連で、イングランドの労働者にしても、組織されてはいるが無力だということでアイルランド問題を提起したり、あるいはアメリカの白人労働者と黒人奴隷との関係だとか、はっきりと下層・周縁と、中枢という言い方はしていないのですが、下層と周縁に変革の契機を見出そうとしている点にとても感銘をうけました。その意味で、現在の日本の労働運動を変革するという観点においても、やはり下層や周縁に変革の契機を見出す必要がある。これはよく私が言っていることで、民間大企業の企業別組合とは別の、その外部に新しい労働組合を構築するという外部構築論を提起しているわけですが、やはりマルクスの下層や周縁に変革の契機を見出すという視座に非常に共鳴しました。

佐々木：木下先生も指摘されたように、これまで哲学・経済学・政治学＝革命論というふうにマルクスが読まれてきたけれども、それとは異なり、社会学、見方によっては歴史学であるとか、非常に大きな広がりを持ってマルクスが議論していることがこの本で明らかになっていると思います。マルクス研究や現代資本主義の理解に対するインパクトという意味で、そのあたりの意義について平子先生にお話を伺いたいと思います。

平子：哲学・経済学・政治学というのは、たとえばレーニンのマルクス主義の三つの構成部分などを念頭に置いて、それを極めて教科書にしやすい形でまとめ

たものではないかと思うのですね。ところが、たとえばマルクスは、哲学の基本的な命題として、真理は哲学の場面においては真理性を確保することができないという発言をしています。つまりどういうことかといえば、哲学というのはいったん哲学の抽象的な概念分析の枠を超えて、その外で仕事をした時にはじめて本来の哲学にふさわしい実りある議論ができる。マルクスの学問はすべて、一般的にいえば、経済学なら経済学の本来の領域の外部にまでいったん降りていった時にその意義が発揮できるわけで、政治学についても同じだと思います。そういう意味では、マルクス主義の三分野というのは、本来、論点としては重なるものだと思います。しかし、重なりながら力点の置き方が非常に異なっていて、たとえば哲学で一番大きな問題になるのは、やはり主体性や実践がどういう意味を持つかという点で、単純に実存主義のように、自分が決意すれば未来が開けるというのではなくて、人間が決意して実践するその場面というのは、何重にも社会関係の枠、たとえば資本の枠、国民国家の枠などでがんじがらめになっている。だから、このがんじがらめになった枠を破るものが何かといえば、それは先ほど木下先生がおっしゃった、なぜマルクスは下層や底辺に変革の力を見出すのかということと関わりますが、もはやこうした状態では生きていけないという、いわば生命の限界にぶつかった時に、既存の枠をうち破るエネルギーがやむにやまれず出てくると思います。他方、そういう極限状態にない人間の場合には、ある種日常的に階級的な社会関係と折り合いがついており、何らかの形でいわば再生産可能な生活が成り立っている。そこが階級社会の付け根なのですけれども、しかし底辺にある人にはそれが許されない。つまり再生産が不可能な死に至る状態にあるわけです。その典型的事例として私がいま思い浮かべているのは、長期の内戦や極限状態の貧困をののがれハンガリー経由でドイツをめざす何万もの難民です。あの人びとは日常性、あるいは既存の社会関係のなかでもはや生きていくことができずに、命がけの行動を余儀なくさせられた。つまり、そういうエネルギーが下層や周縁の人々にはあるということにマルクスは着目します。マルクスはこうした事実こそが哲学の中心問題だと思っていますので、抽象的言説としての哲学の外部にいったん出るわけです。マルクスの場合、哲学とは一番具体的な「矛盾」に着目するということを意味します。その矛盾を一身に担う人々がやはり底辺にいるという認識がマルクスの思想であり理論の根幹ではないかと私は思っています。

アンダーソンも私がいま述べたような立場に立っているように思いますが、矛盾の集約点としてその場に立たされた人々がどうなるかということについては、ある種の哲学的概念を含むようなメッセージを発しているわけではないような気がします。一応、たとえばインドや中国において、イギリス資本主義と闘う民衆を描きますし、七〇年代にはアルジェリアや南米における民衆や労働者が資本主義の支配に抵抗するという論理を出してはいますが。ただ、おそらく彼の別の著作や、アンダーソンの盟友で哲学者のピーター・ヒューディスの著作ではもう少し詳しく触れられているのではないかと思います。というのも、ドゥナエフスカヤの学派は、ヘーゲルを媒介に主体形成の論理を展開していこうという問題意識があるからです。ヒューディスは、アンダーソンのような豊富な歴史分析を若干抽象して、ややロジックだけの展開に終わっているので、ともすると、いわば抽象的な哲学主義にも見えますが、二人とも今日におけるドゥナエフスカヤの継承者を自任していますので、両者の議論を行き来して考えてみるのが良いと思います。

「個人的所有の再建」論と晩期マルクス共同体論は両立するのか

後藤：最もひどい目に遭っている人たちに目を向けるというマルクスの視座と関連しますが、『要綱』の有名な三段階論のなかで、第二段階で物象化に基づく強制的な個人の発展があって、その上に第三段階のアソシエーションが成立するという議論がありますよね。この議論はおそらく西欧に基本的には限定されるという話になると思いますが、人間の発展の基礎として、物象化された世界における強制的な個人化のような契機をいったん潜り抜けるという議論が論理としては明らかにあると思います。けれども、マルクスは『ザスーリチへの手紙』などで、発達した資本主義国のプロレタリアートないしその生産力の助けがあれば、共同体から直に社会主義に進むことは不可能ではない、ということも述べています。その場合、物象化された世界をくぐらないでも、個人の能力の発展が可能になるというイメージをマルクスはどの程度あるいはどのように持っていたのだろうという点が気にかかります。いわゆる「個人的所有の再建」論に関する問題ですね。アンダーソンは、そのあたりの問題をあまり展開していないように思いますが、物象化によって強制された自立性とそれなしでの個人の能力の発展をうまく統一できる人間観をマルクスは提起していた

と彼は考えているのでしょうか。

平子：そこは本当に難しい問題で、アンダーソン自身は必ずしも明瞭に答えてはいないように思います。だから、この著作だけではいま後藤さんが出された疑問には答えにくいですね。ただ、アンダーソンも少し触れている論点を私なりに考えてみますと、やはり「個人的所有の再建」の出発点は、資本主義に先行する私的所有です。私的所有が第一段階でその否定としての復活ということになると、これは共同体的関係の復活ではないですね。共同体が崩壊して、私的所有が一定成立しているので、この原理は西洋に限定されるとマルクスは述べました。こうした「個人的所有の再建」のビジョンと、ロシアも含めて共同体的関係が西洋資本主義の発展、すなわち労働運動と科学技術の提供等々と結びつけば、私的所有の段階を経ずに共産主義の新しい形態に移行できるという認識の間には、一つの大きなパラダイム・チェンジがあったのではないかと私は思っています。実際、ロシアの共同体に対する評価は、たとえば『共産党宣言』ロシア語版序文で述べられているように最晩年ですよね。ですから、非常に難しいのは、『要綱』段階では、資本主義によって展開された生産力が基礎になっているし、資本主義のなかで疎外された関係であれ、普遍的な生産力に対して関わることのできる力を高めた主体というものが前提となって、第三段階に至るという構成となっています。だからそこには、ある種の陶冶といいますか、個性の最大限の発展、そして生産力の発展を習得した主体というものが前提となっていて、これは、下層や周縁に変革の力を見いだすマルクスの問題意識とは本来は少し異なっているように私は思います。どちらかといえば、『要綱』段階は、先進国労働者の力によって資本主義が克服されるという認識と親和的だと思いますね。最終的に、マルクスは、こうした考え方を必ずしも捨てたわけではなくて、それを何らかの形で相対化しながら、両方の考え方をもち続けたのではないかと思っています。両者を理論的にどう整合するかということはマルクスもまだよく見えていなかったのではないかと思います。

後藤：アンダーソンも述べていますが、『六一‐六三年草稿』に「労働条件と労働者の本源的統一の二形態」という記述があって、その二形態とも再建するというイメージがマルクスにありますよね。二形態のうち一つの形態が共同体所有で、もう一つの形態が個人的所有。両方とも再建されるという話になっていますが、その二つの関係についてあまり展開されていません。ですが、平子さんが言ったように、マルクスは両方とも考えていたのだろうという気はします。

佐々木：その辺りの議論は、福富正実さんが一九八九年に『経済学と自然哲学』という本で本格的に論じていました。要約しますと、個人的所有と言ったときに、典型的には大塚久雄さんのように、商品生産社会という話になるわけですけれど、マルクス自身は全くそうではない。つまり、個人的所有というものは、古典古代のギリシャ・ローマにもあったような、共同体的形態の付随物としての私的所有であって、資本主義的な他人の労働の取得に基づく私的所有とは全然違うわけです。特に先ほどの平子先生の議論と関わってくると思うのですが、福富さんの議論が優れている点は、「個人的所有の再建」論を物質代謝論に繋げていくのですね。この視座はアンダーソンにはあまり見られませんが、晩期マルクスの議論においても、やはり物質代謝論が軸になっていて、『ザスーリチへの手紙』やその草稿も農学との関連で読まれるべきだと思います。ですから、マルクスは、農耕共同体やアルカイックな共同体の生命力と言っていますが、この生命力とは私の解釈では物質代謝を持続的に行なう力を意味するのだと思います。こうした力はアルカイックな共同体が一番強くて、その物質代謝を持続可能な形態で行なう力を継承しているのがまさに農耕共同体であると。その生命力は非常に強力なのでその共同体が崩れて新しい共同体に移行した後もなお残っているという議論をマルクスは展開しています。特に、私が最近『ザスーリチへの手紙』を読み返していて発見だったのは、農耕共同体というのはギリシャ・ローマの共同体やあるいはエジプトの共同体と比べて圧倒的に強い生命力を持っているという点です。ましてや資本主義とは比べ物にならないとも書いていますが、これはどういうことかと言うと、資本主義よりも物質代謝の持続可能性があるということは当然で、ギリシャ・ローマやエジプトよりもそうだというのは、実は当時のドイツの農学者フラースの議論に影響を受けているのです。

　フラースは、ギリシャやローマ、エジプトの共同体が、物質代謝を攪乱して滅びてしまったという話をしています。耕作や森林伐採をやりすぎた結果、雨が降らなくなって砂漠化したと。そこからマルクスは、それに比べて農耕共同体というのは、持続可能な生活スタイルをずっと続けてきたので生命力が高いと強調しています。その文脈のなかでロシアの農

耕共同体をもう一度評価するというのが『ザスーリチへの手紙』の最終部分で、要するに、農耕共同体は、私的所有になっていないので、物質代謝の最新の制御の仕方、すなわち農学による科学的知見をもっともよく導入することができると述べています。マルクスは、ロマン主義的に農耕共同体を評価しているのではなく、地代論研究に関連しますが、農学によって明らかにされた、本来の合理的な農業を志向することに力点があります。つまり、ロシアの共同体は、農学を活かすことのできる社会形態である農耕共同体を受け継いでいるので、最新の科学や技術を容易に導入することができる。ですから、マルクスは、むしろ古いもののなかに新しいものと結合する契機を見いだしていくわけです。

後藤：けれども、他方で、工業に関しては巨大な共同的労働手段を使用するという話が出てきますよね。社会レベルで共同占有は実際に成立してはいるが、所有が私的なままなので共同占有が個人の占有になっていないと。だから、所有を社会的にして、かつ占有を個人にとってリアルなものに変更すると。それは個人が自覚して自分の労働力をアソシエーションの仕事として、自覚的・意識的に支出すると描かれています。だから、その自覚的・意識的に支出するという議論において、個人の発達、個人としての自立性、すなわち、個人としての労働過程に関するコントロールがアソシエーションの労働過程に関するコントロールと衝突しない構造をどのようにして時間をかけてつくっていくかというイメージがあると思います。けれども、基本的にはこのイメージで述べられた先の「個人的所有の再建」の論理と、佐々木さんが言われた農耕共同体のもとで暮らしてきた人間が、アソシエーションにおける個人としての自立能力をどのように身につけるのかということの関係が、マルクスの議論において課題となっているように思います。

佐々木：そうですね。その点は解決してはいないと思いますが、ただ、マルクスは『ザスーリチへの手紙』で、アルカイックな共同体と農耕共同体の違いは個人性の発達にあると書いています。つまり、後者においては、所有は共同体所有だけれども、分割耕作を行なって私的に生産物を取得するので、ここに個人性の飛躍のモメントがあると言っていますね。要するに、アルカイックな共同体は完全に血縁関係でがんじがらめなので、個人性が発達する要素が全然ないのですが、農耕共同体というのは、かなり強い共同体規制がありながら、個人で耕作して個人で成果を所有するので、そこに個人が発達するモメントがあるという議論です。そういう一定の個人性をもった農民たちが、日常的に、主体的かつ具体的に共同作業を自分たちで自覚的に運営しているので、そういう意味でもアソシエーション社会を運営する能力はあるのではないかという議論の組み立てにはなっている。この点は、平子先生がご専門のマルクスのマウラー評価に関わりますが、いかがでしょうか。

平子：少し議論を戻しますが、『要綱』における共同体三形態のうち、ゲルマン的共同体と呼ばれているものは土地の個人的所有が確立して、ほとんど共同体規制が希薄化しており、共同体の内実は、時々の集会によって実現されるにすぎません。こういう認識は『ザスーリチへの手紙』へ至る過程で修正されてゆきます。すなわち、全体のトーンとして、カエサルやタキトゥスが記録したようなゲルマン共同体は遥かにそれより古い状態を維持していて、その決め手となっていたのは土地の定期的割替です。つまり、土地の私的所有は認められず、一年か二年おきに土地が必ず割り替えられます。個人的所有の個人性も、その限界内での個人性へと修正され、その結果、この共同体はゲルマン的共同体というよりも、もう少し広い世界史的パースペクティブに置かれて、アルカイックな共同体の最後の形態に位置づけられるわけです。そこから土地の定期的割替などが脱落して、個人的所有が確定する。最終的に土地が農家のものになった段階が農耕共同体の派生的形態と位置づけられます。内容的にはこれが『要綱』のゲルマン的所有に当たります。このゲルマン的所有は本来の農耕共同体がいわば変質して私的所有に向かって大きく一歩踏み出した直後の段階として位置づけられております。共同体の土地規制が非常に強い場合には、土地の個々の家族への分与が認められず、部族を単位とする集団耕作・集団収穫が基本形態になりますが、これがアルカイックな所有の第一段階です。カエサルが『ガリア戦記』で描いたゲルマン人の耕作形態がこれに該当します。そこから土地の共同所有は維持されつつも、耕作が各個別的家族の裁量に委ねられ、その結果として収穫物も各家族の個体的所有となり、こうして生産における個性の飛躍的発展がもたらされる段階が自生的に発展してきます。これが、アルカイックな共同体の第二段階である農耕共同体です。タキトゥスが『ゲルマニア』で描いたゲルマン人の耕作形態がこの段階に当たります。これに続いて、『要綱』に描かれているゲルマン的所有が共同体所有

から私的所有への移行形態として位置づけられます。このように、共同体の歴史的発展に関するマルクスの視野はより複雑に、かつより精緻化されてゆきます。

木下：実際に、土地の割替という問題は、晩期のインド共同体論においても登場しましたよね。マルクスはのちのヴェーバーの議論に繋がってくる視点もすでに提示しています。

平子：そうですね。だから、土地の定期的割替を伴う共同体はゲルマン的形態ではなく、もう少し広い世界史的パースペクティブのなかで把握されるようになります。そのなかで面白いことは、アジア的形態が、『資本論』までは、最も古い共同体形態と位置づけられておりましたが、『ザスーリチへの手紙』段階になると撤回され、むしろ、古代的形態の最新形態として、ロシアの共同体と概念的には同じポジションを与えられます。だから、そのアジア的形態が変化してローマ的形態やゲルマン的形態が出てくるという大塚久雄さんの議論とは異なり、両者はアジア的形態より古代的な形態の変形したタイプであるとされます。つまり、歴史的発展の可能性をアジア的形態のなかにも認めるというのがマルクスの最晩年の構想で、これらが著作にでもなってくれればマルクス主義の歴史はずいぶん変わったでしょう。

現代社会における「資本の文明化作用」

後藤：さらに私の方から問題提起をさせていただきますと、現代の我々にとってかなり大きな論点となるのは、「資本の文明化作用」に対してマルクスがどんどん懐疑的になっていくということです。インドや中国、アイルランドについても、基本的にただ痛めつけただけで結局文明化しなかったのではないかという議論になっていくと思うのですが、すでに一九世紀末以降はダブリンの描写に見られるように少し様相が異なってきますし、現在でもインドやアイルランドの資本主義的発展は一〇〇年単位の規模でみて相当大規模に起きてしまっている。これを把握するためには、マルクスがつかんだ資本主義批判すなわち文明化作用の否定を踏まえた上で、再度新しいレベルで現代に合わせて問題提起しなければ、現状と歴史の位相がずれ過ぎていて、そのままでは使えないだろうと思います。ただその場合に、マルクスが一八四八年の議論から大きく変化して、六〇年代、七〇年代につかんだ資本主義理解をどう現状分析の中に活かすのかは、相当多くの媒介を入れることが必要だろうという気がします。

これまで私は、大衆社会や、大衆社会の高次段階における文化文明ストックという言葉を使ってきましたが、結局、その文化文明ストックに現存社会主義国の人たちも吸い寄せられ、競争するはめになって自壊していったという大きな絵を九〇年代に描きました。第三世界から見ても、先進資本主義国のもつ文化文明ストック、すなわち高度な大衆社会の生活スタイルはものすごい吸引力を持っていて、なかなかそれに抵抗できないという実態がある。だから、これは文明化作用の現代的な形態の一つと思っていますが、本当に強烈で、なかなかそれに抵抗することは難しい。しかし、他方で文化文明ストックを実現しようとする経済の動きは、現代においてグローバル化を深化させ、金融を実体経済から激しく分離させました。そして、大きく見ると、ネイションどうしの格差はすさまじい勢いで広がっています。また、ネイションごとに人々が分断されていること自体がフィクションというか、実際にはネイション＝ステイトとしての責任が取れない地域が山のようにあるわけでしょう。つまり、文明化作用のマイナスの側面がとんでもない姿で表れてきているという批判は、決して特異なものではなく、マルクス主義者が普通にやる批判だと思うのです。ただ、現代においては、その文明化作用が文明化させないで放置したままという状態とは異なり、文明化しはするがかなり酷い目に遭わせるというものになっている。つまり、二〇世紀初頭でも既にアイルランド、インド、アメリカはマルクスが見た世界とは相当変わっているはずで、文明化しないで壊すだけだという、すごく荒っぽく言えばそういう批判の仕方だけでは有効ではない。では、どういう批判の仕方を定式化したら良いのか難しいところですが、我々に残された課題だと思います。

佐々木：「文明化作用」に関してマルクスが最も本質的だと考えていたのは、先ほどの物質代謝論の関連で言うと、広義の意味での生産力の発展だと思うのですよね。単に時間単位当たりの生産量が増えるということではなくて、物質代謝の媒介力・制御力というのが増大していく。言い換えると科学の発展だと思いますが、『要綱』の「文明化作用」論において議論された自由時間の増大も関係してくると思います。ただ、実際には物象化の力が浸透して人々の欲望の在り方や生活スタイルがどんどん変化し、その物象化した社会のなかに人々が包摂されていくというのが、後藤先生のおっしゃった問題だと思いますが、いわゆる社会学的な消

費社会批判といった問題意識が晩期も含めてマルクスのなかにあったといえるのか。もちろん抽象的にはそう言えて、たとえば、『資本論』の商品・貨幣章はこうした議論ができる枠組を与えてくれていると思いますが、のちに大衆社会論で問題になることをマルクス自身がどこまで論じていたのかについてはいろいろな見方があると思います。

マルクスの資本主義批判とその研究方法を実践にどう活かすか

佐々木：最後に晩期マルクス研究の射程と関連させて、日本社会を変革していく上での現代的意義について考えてみたいと思います。

木下：マルクスには、当然ではありますが、社会を構造的に捉えていて、たとえばアイルランド論では貴族的地主階級の拠点がアイルランドにあるから、イギリスの支配階級が非常に強いのだという議論、あるいはアメリカの南部に関しても、奴隷制を合衆国全体に広げることで、奴隷制を基礎に資本主義を再編するというように、単に分析するだけではなくて、問題の根本をしかも構造的に建物みたいにつかんでしまう理論力があります。それに比べて我々は日本の企業社会や開発主義を、まだまだつかみ切れていないと感じたところなのですが、マルクスは、構造的に分析することをどこの国でもしっかりやってのける。地球上すべてを分析してやろうというすさまじさと、なおかつ、きちんと変革展望をつかむというこの姿勢は、繰り返しになりますが、我々が学ばなければいけない点です。

　また、つくづくマルクスが理論家だったと思うのは、先ほど社会学者と言いましたが、現代の社会学なんてほとんど実証研究ばかりで、理論研究はありません。要するに、マルクスはアカデミックな実証研究をあますことなく自分のものにしながらも、それを現実や運動のために理論化していく。こうした理論的作業をできる学者が現代ではあまりにも少なすぎるということが労働分野でも言えるけれども、アカデミズムを軽視することなく現実の運動をきちんとつかんで、理論的概念を作り上げる人たちがもっと必要ですね。

佐々木：そうですね、マルクスそのものを解釈するのも大事ですけれども、それを使って現実を分析する枠組みを発展させていく必要がある。特に、ジェンダー論についてはそう言えるのではないでしょうか。

平子：大まかに晩期マルクスのジェンダー論を紹介しておきますと、エンゲルスの「女性の世界史的敗北」に対するアンチテーゼとしてアンダーソンの研究があって、そこでの力点は、マルクスが私有財産導入以前のクラン社会における男女関係はエンゲルスが描いたものよりもはるかに複雑だったと考えていたという点です。すなわち、クラン社会においても、すでに男性の女性に対する抑圧と思わしき現象があったと。そして、私有財産導入後も単純な女性の敗北ではなく、確かにギリシャ時代に一気に女性の抑圧が強まったけれども、それがローマ時代になって弛緩するというように、非常に複雑な展開をとげたと述べられています。ただし、こうした晩期マルクスのパースペクティブを現代のジェンダーやセクシュアリティの問題にどのように活かすことができるかは今後の研究課題ですね。

木下：日本の女性運動に関しては、一方で、労働運動においてエンゲルス的な階級還元論が根強く残った結果、男性中心の労働運動に組み込まれてしまい、他方では労働運動と全く切り離されたところで女性学とそれに基づくフェミニズム運動があって、互いに分断されてしまっているのが日本の社会運動上の悲劇といえるのではないでしょうか。

平子：アメリカの場合は人種やエスニシティの問題が非常に可視的なかたちで存在しており、しかも明らかに可視的に底辺層ですよね。だから、アメリカの場合はジェンダー論で女性の抑圧や差別を議論する場合に、家父長制のもとで女性が差別されている事実をただそれだけのかたちで言いにくい環境があると思うのです。だから、何らかのかたちで、たとえばエスニック・マイノリティの女性差別の問題とか、そういうかたちでもう少し分節化・相対化してジェンダー・イシューを捉えざるを得ない現実があると思います。

　しかし、日本の場合は、もちろん注意深く見れば、たとえば在日コリアンや日系ブラジル人など、エスニック・マイノリティの問題が存在しているわけですが、いわゆるジェンダーを対象として分析する人は、家父長的家族なり、ある種構造的に女性が抑圧されるなかで、女性をある意味では一義的あるいは独占的に下層として設定できてしまう環境があって、この点をもう少し反省的に打開していかないと、少なくとも国際的に通用する議論にはなりにくいのではないかと思います。フランスにしてもドイツにしても、エスニック・マイノリティの存在がものすごく大きく、いまやどんどん流入して

こようとしている中で、ジェンダーの問題も捉えられている。日本だけがそういう流れから取り残されているという印象があって、それはおそらく労働の問題もジェンダーの問題も日本的にゲットー化された関係の中で捉えられがちであることが背景にあります。その枠を超えているのはもしかしたら資本なのかもしれません。資本はどんどん国民国家の枠を超えていくのだけれども、ジェンダーと階級の問題はまかり間違うと日本的な関係だけで説明されてしまう危険性がある。私自身専門ではないので不遜かもしれませんが、マルクスの立場からはそういう批判なり反省があっていいと思います。

木下：そうですね、やはり日本社会はいまだリベラル・フェミニズム段階だといえるかもしれません。昨今でも「マタハラ」問題が生じていますが、フェミニズムと労働運動が結びつく必要があるのに、これまではそうなっていない現状がありました。

後藤：その意味では、やはり日本型雇用の影響力はものすごい。現在でも、たとえば非正規雇用に社会保険を拡大する、つまり家族控除・扶養控除を廃止するという話に、かなり労働組合が抵抗する現実があります。それも正規雇用の労働組合が抵抗するだけでなくて、生協労連などいわゆるパートが大半を占めている組合においても組合員に抵抗感がある。結局たくさん負担することになるではないかと。それはその通りで、一〇〇万円以下という制限で働いている女性たちから見ると単純な負担増なのですね。おそらく配偶者控除廃止をいまの安倍政権はやるつもりでしょうが、その目的は女性たちを社会保険に入れて、社会保険料をふんだくるというものです。しかし、オルタナティブな議論として、きちんと働いて税金も払って、一人でも暮らしていけるように女性たちの環境を作ろうという主張がなかなか主流にならない。やはり夫の稼ぎに依存してやっていけるとかなりの人がまだ思っているからだと思います。

木下：企業社会による強烈な吸引力は、家族をも統合してしまうのですよね。労働者が統合されるだけでなくて、家族全体が統合されるという強力なメカニズム。日本型雇用もそうですが、日本の特殊性といわれる村落共同体や家制度なども、もしマルクスが生きていれば必ず構造分析していると思います。また、晩期マルクスの共同体論に関連させるならば、現代日本の農村もまだ共同性が完全に解体されたとは言えませんし、TPPや後継者問題など、どのようにして村落共同体を再建するのか、あるいは解体させられるのかの岐路に立っていると言えるのではないでしょうか。

佐々木：最前線のマルクス研究における本書の意義にとどまらず、現代資本主義分析における意義にいたるまで、非常に広い範囲で濃密な議論ができたのではないかと思います。本日はどうもありがとうございました。

たいらこ　ともなが

1951年生まれ。一橋大学社会学研究科特任教授。共著に『思想史と社会史の弁証法』（御茶の水書房、2007年）、『資本論体系第一巻　資本論体系の成立』（有斐閣、 2000年）、『高島善哉著作集第7巻　マルクスとヴェーバー』（こぶし書房、1997年）、共編著に『遺産としての三木清』（同時代社 、 2008年）、共訳書にケヴィン・B・アンダーソン『周縁のマルクス』 （社会評論社、2015年）など。

ごとう　みちお

1947年福島県生まれ。都留文科大学名誉教授。専門は、社会哲学、現代社会論。著書に『ワーキングプア言論――大転換と若者』（花伝社、2011年）、『戦後思想へゲモニーの終焉と新福祉国家構想』（旬報社、2006年）、共編著に『新たな福祉国家を展望する』（旬報社、2011年）、『講座　現代日本　全四巻』（大月書店、1997年）など。

ささき　りゅうじ

1974年生まれ。立教大学准教授。著書に『私たちはなぜ働くのか――マルクスと考える資本と労働の経済学』（旬報社、2012年）『マルクスの物象化論――資本主義批判としての素材の思想』（社会評論社、2012年）、共著に『労働と思想』 （堀之内出版、2015年）、共訳書にケヴィン・B・アンダーソン『周縁のマルクス』（社会評論社、2015年）、ミヒャエル・ハインリッヒ『『資本論』の新しい読み方』 （堀之内出版、2014年）など。

きのした　たけお

1944年福岡県生まれ。元昭和女子大特任教授。専門は現代社会論、労働社会学、女性労働。著書に『若者の逆襲――ワーキングプアからユニオンへ』（旬報社、2012年）、『格差社会にいどむユニオン――21世紀型労働運動原論』（花伝社、2007年）、『日本の賃金』（平凡社新書、1999年）、共著に『なぜ富と貧困は広がるのか――格差社会を変えるチカラをつけよう』（旬報社、2009年）など。